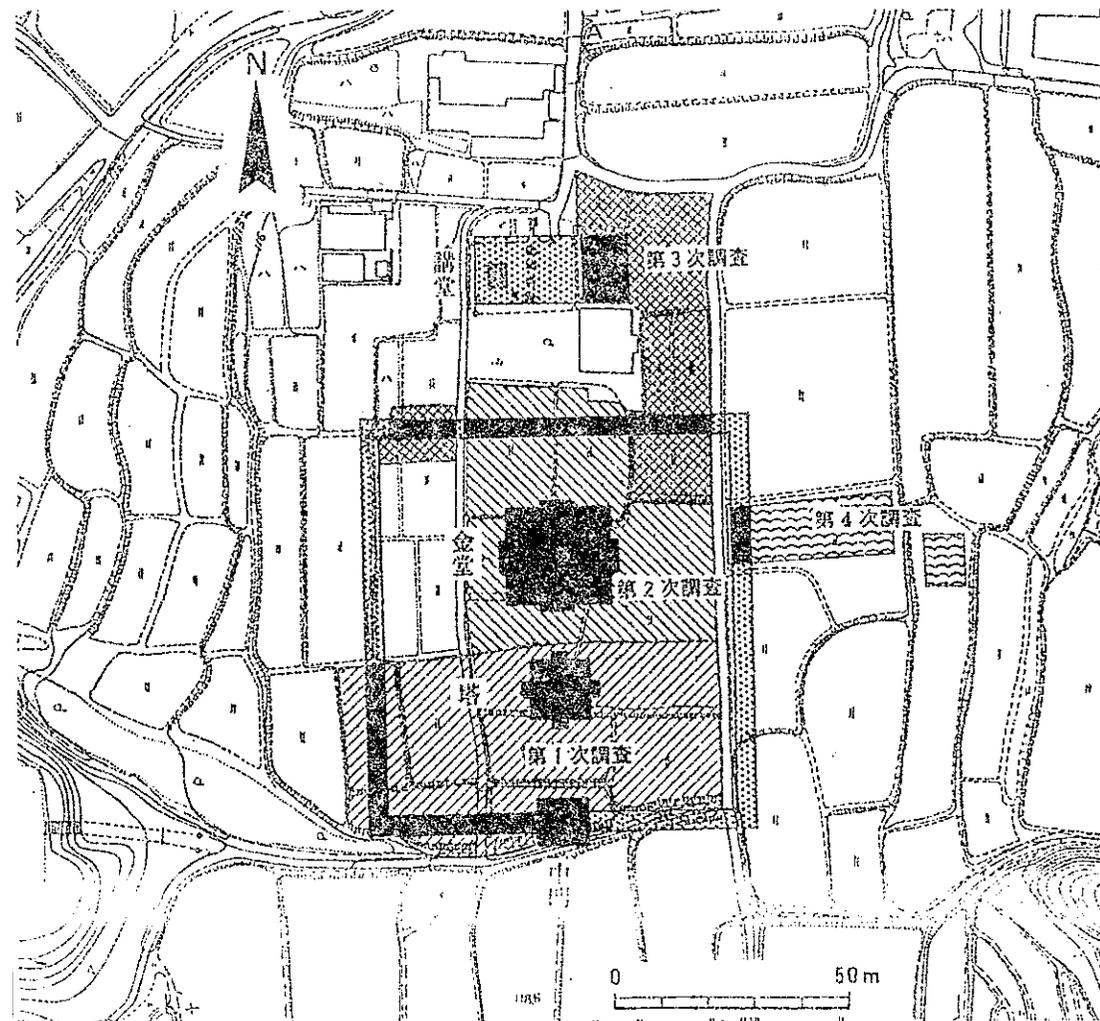


1. はじめに

当調査部では、奈良県桜井市山田にある山田寺跡の第4次調査を8月23日から実施している。今回の調査は、東面回廊及び寺域の東限確認を目的としたもので、調査面積は約500㎡である。山田寺跡については昭和51年以来3次にわたる調査を実施している。今回の調査では、良好な状態で東面回廊の遺構を検出するとともに寺域の東限を推定する手懸りを得たので、これまでの調査結果について概要を述べる。

2. 検出遺構

東面回廊 単廊で、桁行3間分を検出した。今回検出した東面回廊は北東隅から6・7・8間目にあたる。礎石はいずれも原位置を保っており、柱間は桁行・梁



行とも3,78m等間である。基壇縁の検出は東側のみにとどまったが、大形の花崗岩玉石を立並べている。東側柱心から基壇縁までは1,3mあり、基壇幅は約6,4mに復原できる。基壇高は礎石上面までで約60cmある。回廊の床は、外面よりもやや高くなった土間床である。西側柱列の礎石には地覆座はなく、東側柱列は礎石の北と南に地覆座を造り出し、礎石の間は幅27cmの榎原石の切石を地覆石として据えているので、回廊は西側（内側）は開放され、東側は連子窓などの柱間装置をもっていたことがわかる。東側柱列のうち北の間については、地覆石の上に地覆（壁を受ける横材）が遺存している。その地覆には、一間分の柱間を三等分するように穿った納穴の痕跡を確認できるので、この位置に束をたて、その上部は連子窓を設けていたものと推定される。

金堂・北面回廊の礎石に単弁十二弁の蓮華座があることはすでに確認されていたが、東面回廊にもそれを確認できた。西側柱列の礎石は一辺65~70cmの方座の上に上面径約45cmの蓮華座を造出している。一方、東側柱列の礎石は蓮華座を一周させず、地覆座の突出部分にはない。

第1次調査では東面回廊は10世紀後半に倒壊したものと推定した。今回の調査においても基壇上には厚さ50cmで完形品を多く含む瓦が一部ずり落ちた状態を示しながら堆積しており、それに混って斗や頭貫などの建築部材が出土しているので、先の推論を補強する資料を得たことになる。

その他の遺構 東面回廊から東の部分については現在調査中であるが、西区では南北方向の素掘溝2、石組溝1、土塁1、瓦溜1を検出した。

回廊の東19mと20,5mには素掘溝Bと石組溝C、素掘溝Bの西には土塁がある。石組溝Cは素掘溝Bを埋立てた後に構築されている。側石に花崗岩玉石を2~3段積み重ねており、内法80cm、深さは70cmある。堆積土からは瓦・木簡とともに奈良時代の土器が出土した。素掘溝Bからは7世紀代の土器が出土しているので、創建時まで溯る可能性が高い。土塁は上面幅2,2m、下面幅3m、高さ0,6mあり、盛土中には瓦が含ま

ている。

これらの素掘溝B、石組溝Cは、地形からみて、東からの流水が回廊に流れこむのを防ぐ機能をもつ基幹水路であったと思われる。

東区の遺構には、地山面で検出した東西方向の掘立柱塀1、素掘溝D、土壌がある。掘立柱塀の柱掘形は一辺1m、柱間は2,3mである。4間分を確認した。素掘溝は西へ向って深くなる。堆積土からは多量の瓦とともに奈良時代の土器が出土した。土壌Bは、現状での深さは約30cmあり、奈良時代の土器とともに三彩、ガラス片、神功開宝が出土した。

3. 出土遺物

多量の瓦のほかに押出仏、木簡、施釉陶器（三彩、緑釉、灰釉）、ガラス片、金銅製飾金具、銭貨（神功開宝）、墨書土器（口寺）がある。

押出仏は大小2種3点が回廊の東方から出土した。両種とも独尊の如来坐像で、すでに塔・金堂周辺から出土している十二尊連坐尊仏と同じ様式である。大は1点出土し、縦6,8cm、横4,4cm、厚さは0,25~0,32mmあり、一部に鍍金の痕跡が認められる。釘穴は上部に1ヶ所あり、長さ1,1cmの銅釘が残っている。小2点は長さ24cmの木片に約3,5cmの間隔をあけて、上下に打ち付けられたものであるが、木片の上端に2個の釘穴が残っているため、少くとも3段は打ち付けられたものである。縦3,15~3,75cm、横1,75~1,8cm、厚さ0,2mmで前述の押出仏の約1/2の大きさである。漆地の上になぞかに金箔の痕跡が確認できる。これらの押出仏は奈良時代から鎌倉時代の遺物が出土する包含層から出土したものであるが、山田寺の尊仏と同じ様式であることから、製作年代は塔あるいは金堂の建立時期まで遡るものと思われる。今回の出土例は、押出仏のなかでは小型であることと、打ち付けられた木片が小さいことから、厨子に飾られていたものと推定される。

木簡は2点あり、石組溝Cと包含層から各1点出土した。石組溝C出土のものは断片である。包含層出土の木簡は題籤で、縦方向で二行にわたって「口口寺 経論司」と墨書されている。

瓦には軒丸瓦、軒平瓦、榑先瓦、蓮華文鬼板片、鷓尾片のほか多量の丸瓦・平瓦

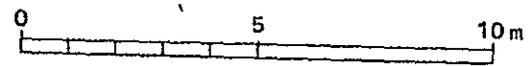
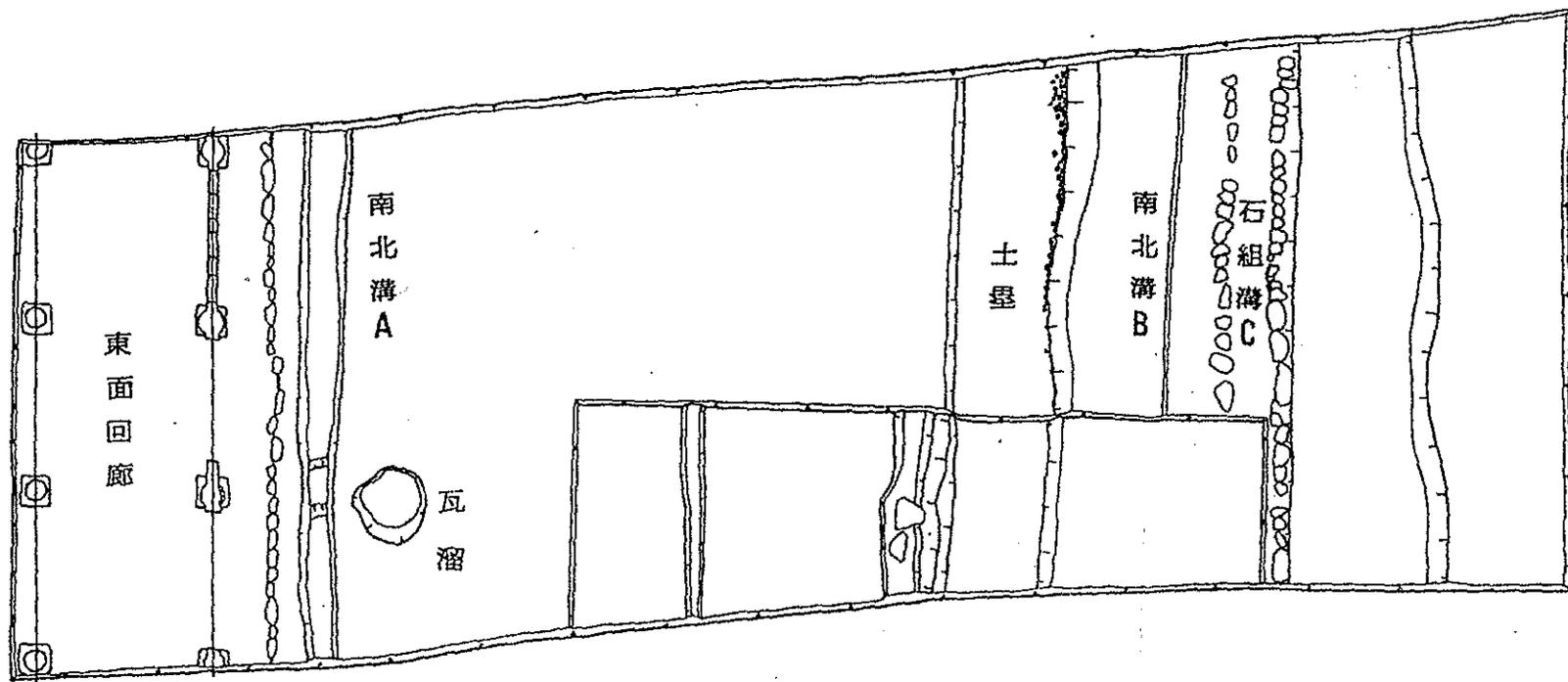
がある。「山田寺式」軒丸瓦については、現在6種に分類しており、その中で小型のDが出土軒丸瓦の約半数を占めている。回廊所用瓦はD種であった可能性が高い。また軒平瓦では凸面の顎の近くに十八、十九、というように番付を朱書したものが出土している。これらの朱書は、瓦を葺く際にその場所を明示するためのものと思われる。このような例は古代の寺院においては始めて確認でき、しかも最古の例であり、注目される。

4. まとめ

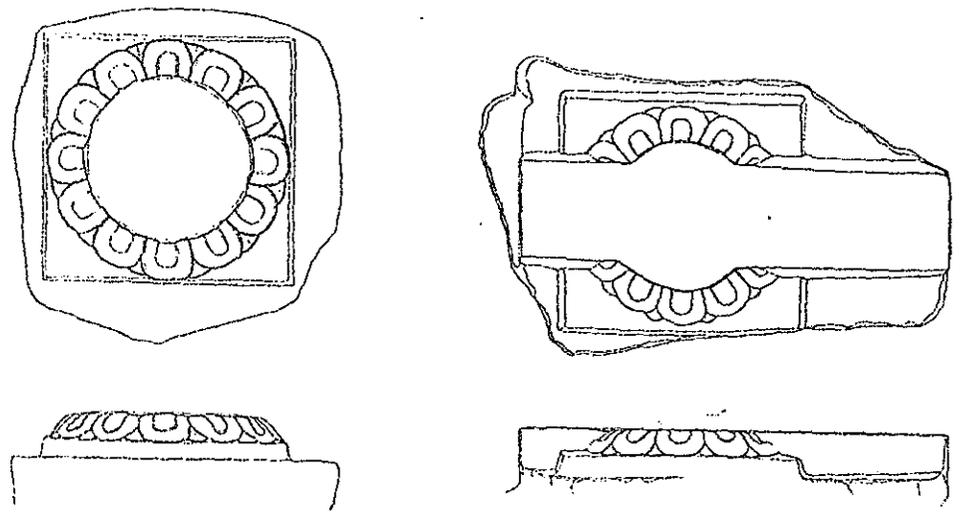
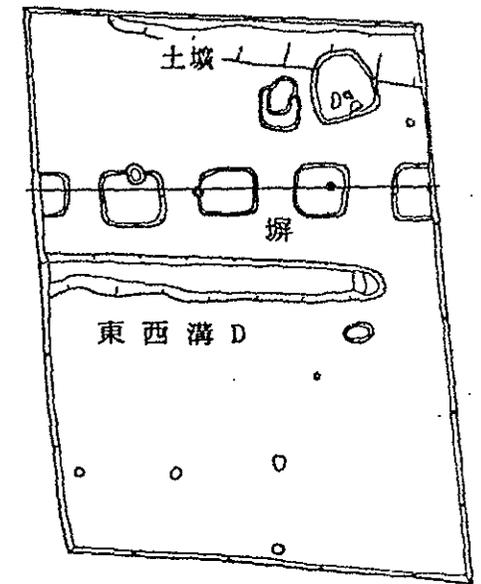
今回の調査で東面回廊を確認したことにより、回廊の東西規模が明らかになった。先の3次にわたる調査によって、北面回廊では伽藍中軸線上に柱位置があることが判明しているため、中軸線から東面回廊までは11間あることになる。さらに、中軸線から西方に折り返すと、回廊の東西規模は22間（約94,7m）となる。一方、寺域の東限は中軸線から約75mの位置で、東区と西区との間にある水田畦畔を考える説が従来有力であった。しかし、東区では寺院に関係すると推定される掘立柱塀や溝のほか、軒瓦・榑先瓦をはじめ、多量の丸・平瓦が出土しているため、寺域東限はさらに東へ拡がる可能性が強まった。

山田寺略年表

641 (舒明13)	平地を始める
643 (皇極2)	金堂を建てる
648 (大化4)	初めて僧が住む
649 (大化5)	蘇我倉山田石川麻呂等に遇う
663 (天智2)	塔を構える
673 (天武2)	塔の心柱を立てる
676 (天武5)	塔露盤を上げる
678 (天武7)	丈六仏を鋳る
685 (天武14)	仏眼を点す
699 (文武3)	封戸300戸を施入
703 (大宝3)	文武天皇、四大寺及び山田寺、四天王寺に齋を設ける
1023 (治安3)	藤原道長、山田寺に立ち寄り堂塔を見る
1034 (長元7)	検校善妙、石川麻呂の忌日に初めて法華八講を修す
1096 (嘉保3)	山田寺の鐘を多武輪の鐘楼にかける
1187 (文治3)	興福寺の僧、山田寺の薬師三尊像を強奪する

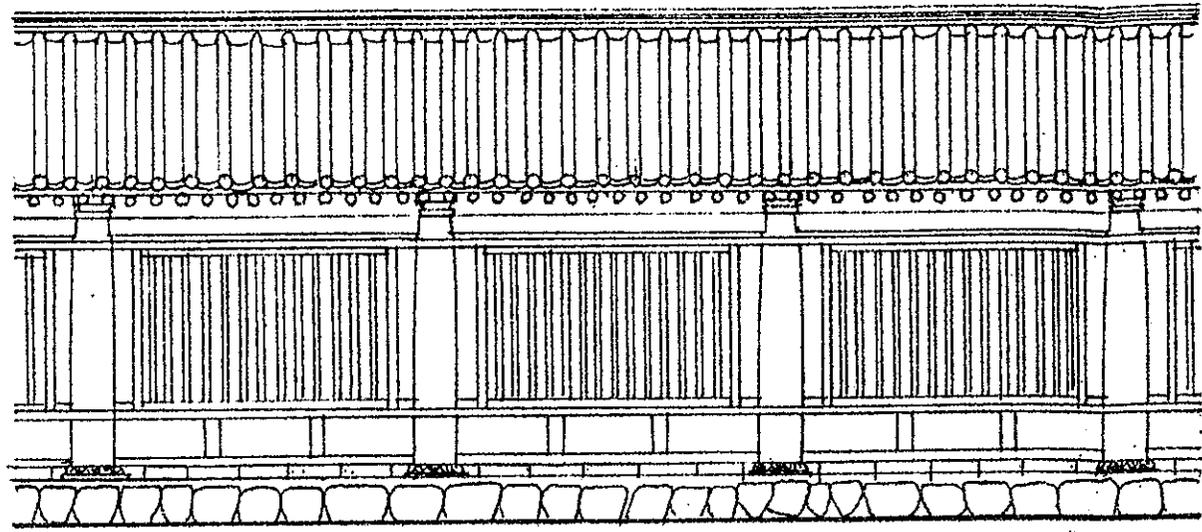


遺構配置図

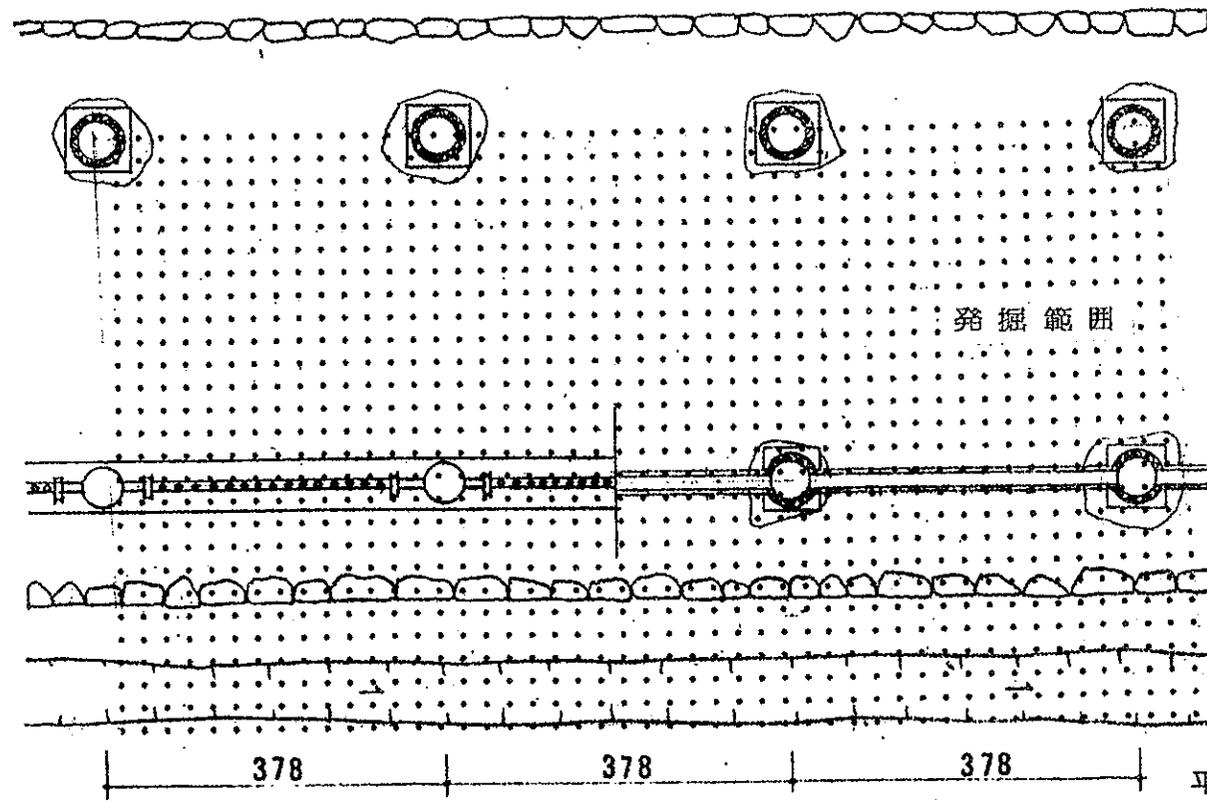


蓮華座礎石模式図 (約 1:20)

回廊復原圖

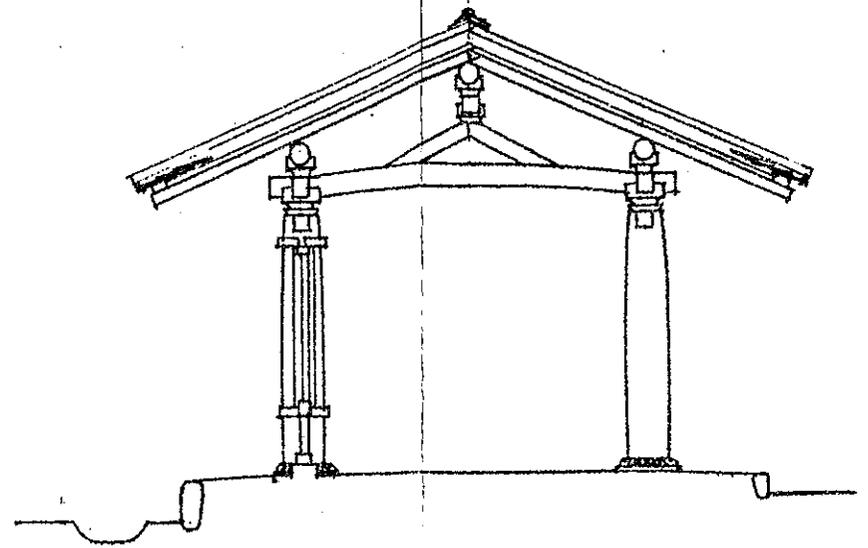


正面

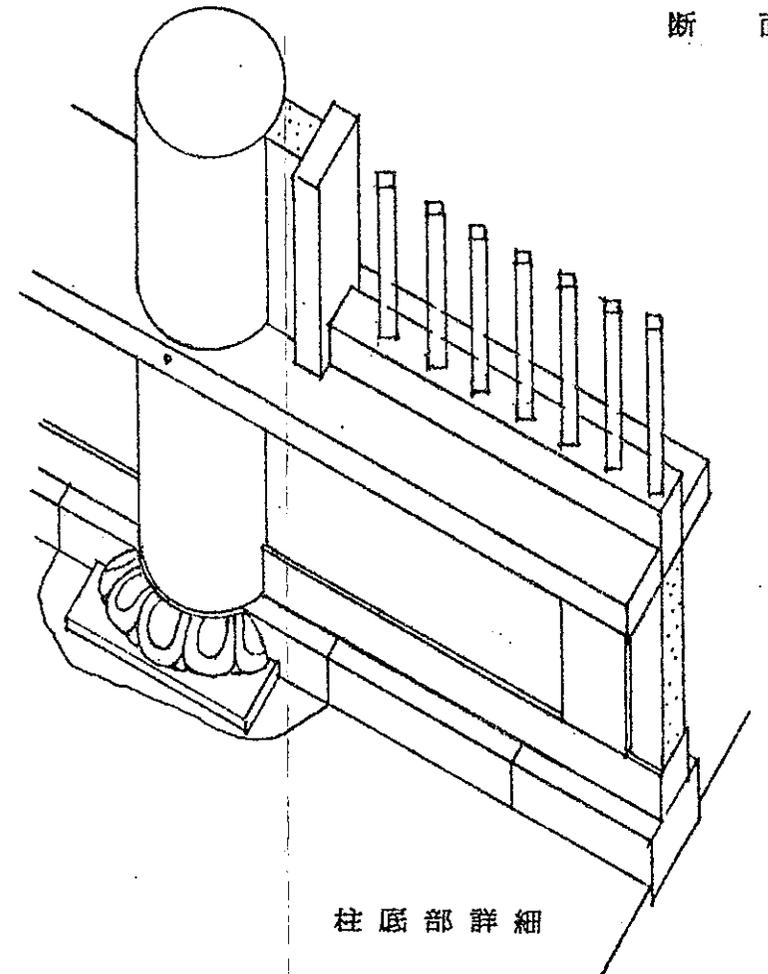


發掘範圍

平面



断面



柱底部詳細

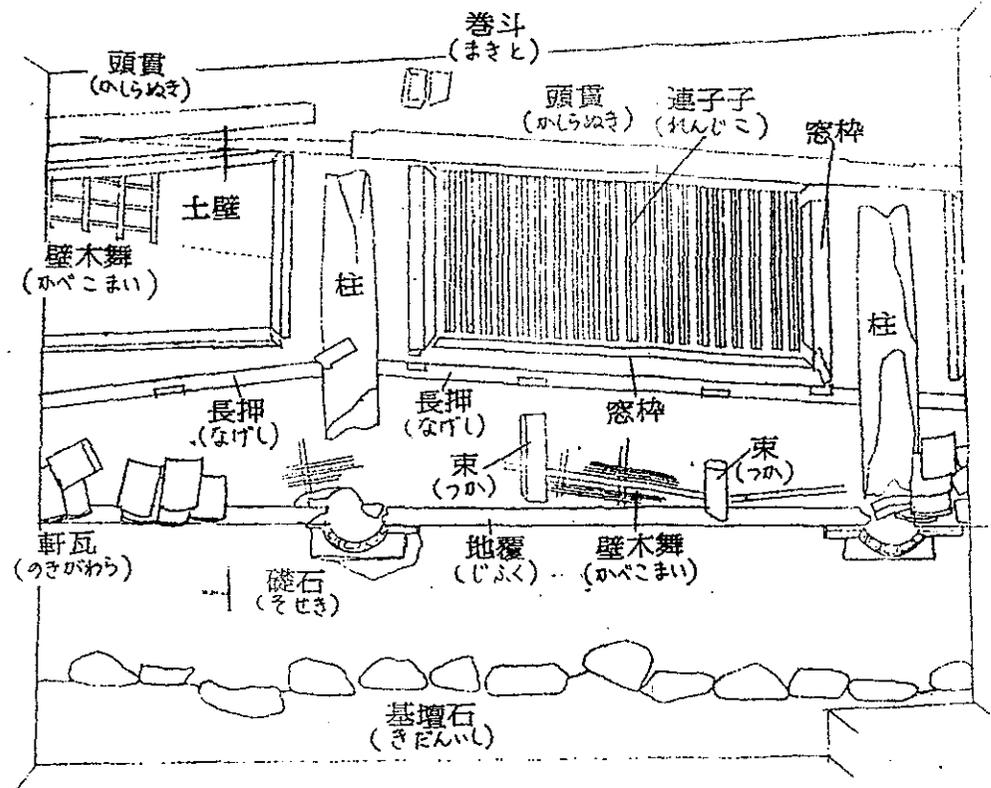
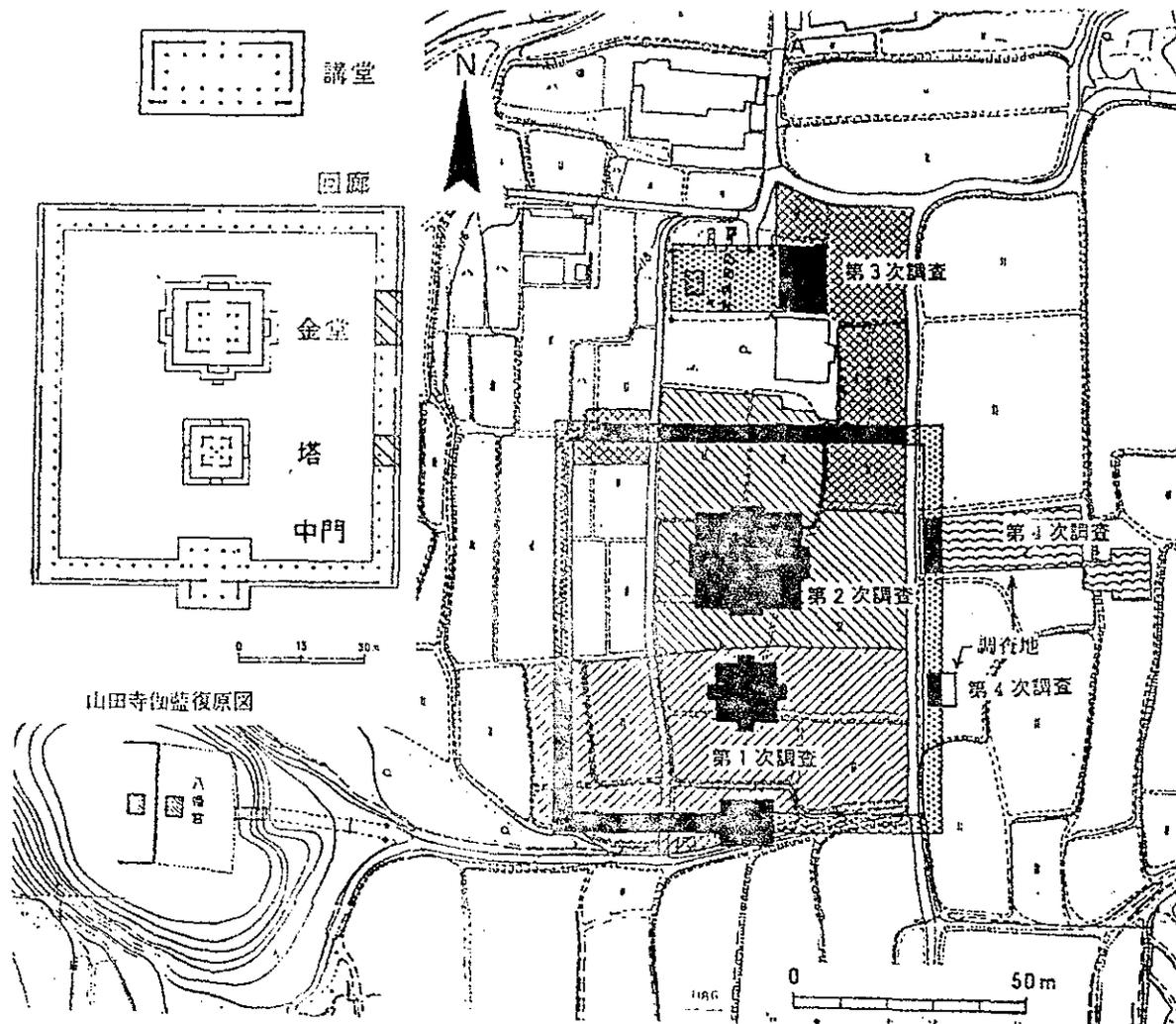
山田寺跡第4次発掘調査概要(奈良国立文化財研究所)

- 調査期日 昭和57年8月23日～
- 調査面積 約550m²
うち南区面積 43,2m² (南北7,2m、東西6m)
期日 11月17日～
- 調査目的 東回廊及び寺域東限の確認
- 東回廊

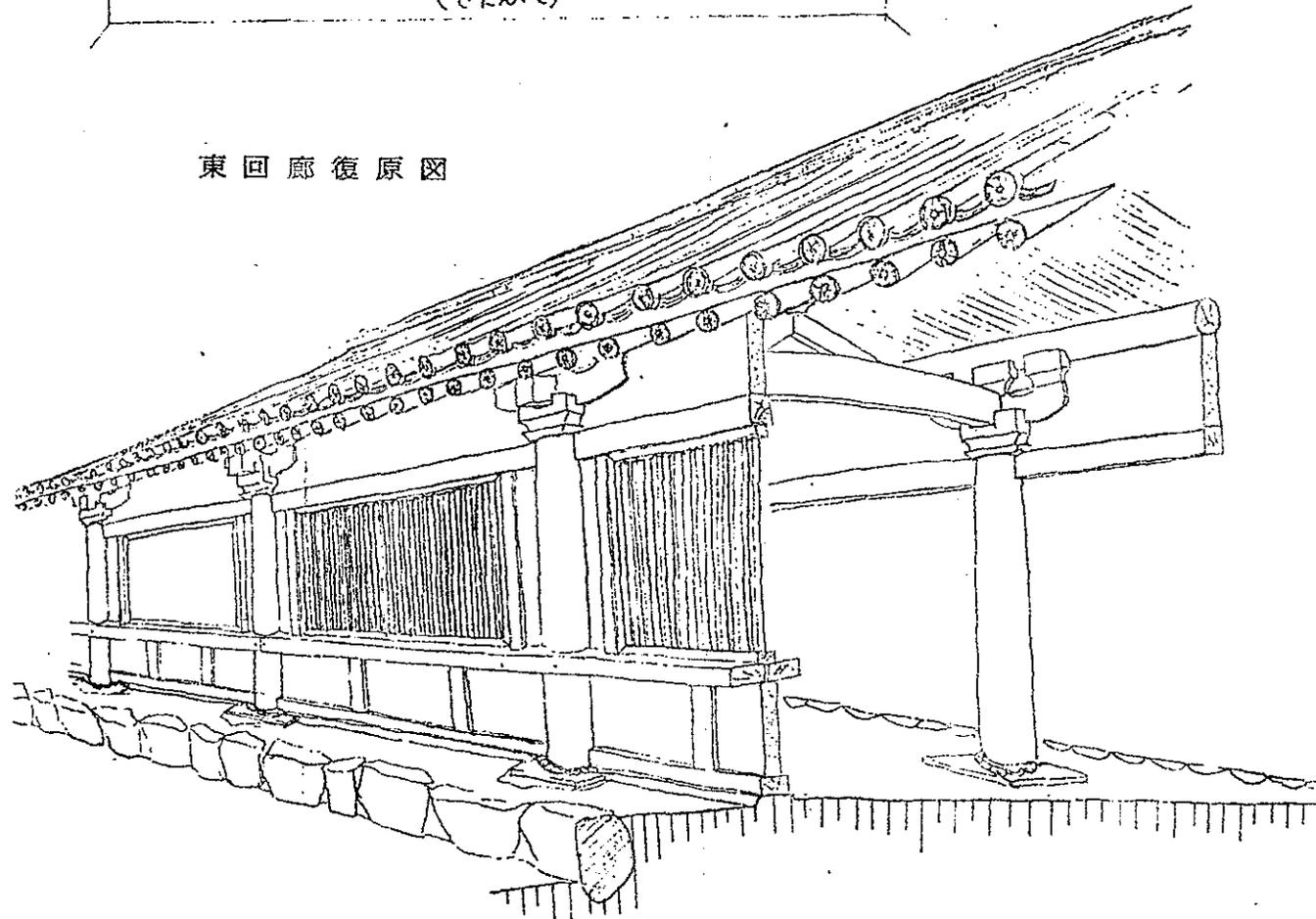
発掘箇所：回廊の東北隅から南へ6～8間目(北区)と15・16間目(南区)

倒壊状況：回廊の東側部分とそのままの状態以西へ倒れた

建立年代：7世紀中頃 倒壊年代：10世紀後半～11世紀前半



東回廊復原図



発掘状況図